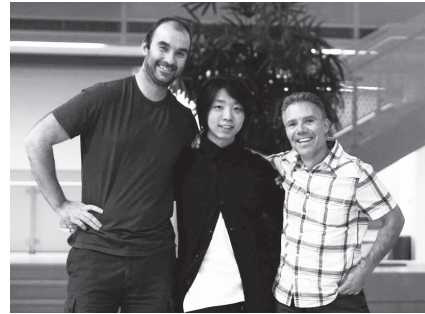


ワクワク留学体験記

Microsoft Research

～すごいことをするために～

落合陽一 (メディアアーティスト)



1. Microsoft Research に行くまで

2013 年 10 月、当時、博士 1 年だった僕は、指導教官の暦本先生から「来年の夏どうする？ 行く？」と言われ、なんとなく楽しそうだったから、と特に考えなしに Microsoft Research のプログラムの CV を送ることになった。ラボの先輩の樋口くん (以下ひぐひぐ) がその年の夏にインターンをしていたこともあり、CV の書き方と書類の書き方はひぐひぐに教わって、あらゆる書類を埋めていった。

CV を出し終わると、4 箇所から面接の問い合わせが来た。後から聞いたことだけれど、僕が Apply した World Intern Program は、まず送られてきた候補者のリストが集められ、そこからメンターを希望する人々がピックアップしていくことによって、候補者が絞られる。僕はメールを返したり、予定を管理したり、事務書類を埋めたりすることがものすごく苦手よくすっぽかしてしまうのだけれど、無事に 3 箇所と Skype 面接の日取りまでは確定することができた (調整で一つロスした)。

まず、最初に面接をしたのは Eyal Ofek 氏 (以下 Eyal)。彼は illumiRoom や SIGGRAPH の研究などで聞いたことがあったので、わー、楽しそうとノリノリでディスプレイの話や、質感の話で盛り上がる事ができた。提案書は出すけど、通るかどうかは運次第だから落ちたらごめんねと言われ、無事に面接を終えた。次に面接を Sasa Junzovic 氏 (以下 Sasa) と Michel Phaud 氏 (以下 Michel)、彼らは illumishare や UIST の研究などで存じ上げていたので、わーこども楽しそうと、インタラクションの話で盛り上がった。このときに Sasa が言った「Motion Picture を Redefine する」って言葉が妙に印象的で、これまた提案書の内容を決めて、終わった。

最後に面接をするはずだった、インド系の研究者の方がいたのだけれど、ミーティングに 2 回寝坊したので、面接することなく面接期間を終えてしまった。確か WiFi とかデバイスとかやられている方で、僕の興味とは微妙にずれていたの、メールを返しそびれたりして

いるうちに、面接から外れた (ここでも一つロスして候補が減った)。

最終的に Sasa と Michel の提案が通り、Sasa と Michel のところで夏お世話になることになった。その後、SIGGRAPH のテクニカルペーパーを書くシーズンが忙しく、MS に登録したり、Visa 用の書類を書いたりするのが遅れているのを Sasa に突かれながら、なんとか、MS から送られてくる事務書類をくぐり抜けることができた。

TEDxTokyo の準備をしているうちに Visa がおそろそかになり、Visa 書類が揃う頃には MS にいく日を過ぎていた。Sasa と関係各所に平謝りしながら、MSR のあるレッドモンドに着いたのは 2014 年の 6 月 21 日、当初の日程から 1 週間を過ぎた頃だった。沈まぬ太陽、爽やかな風、シアトルの夏の始まりだ。

2. Microsoft に行ってから

MSR に着いた僕が最初に行ったのは、今年も MSR に来ていたひぐひぐに電話をかけることだった。ひぐひぐと食べるハンバーガーはアメリカ的なボリュームで美味しかったし、飲んだ IPA はすごく美味かった。それを皮切りにこの夏、ひぐひぐと食生活のあらゆるところでビールとハンバーガーを嗜みに行くことになるとはその時にはわからなかった。シアトルは全米で一番ビール工場が多いのだ。

MSR のインターンはまず、MS の研修を半日受けて、MS や仕事について学ぶことになる。お昼時になると講習センターにメンターが迎えに来てくれて無事にご対面、お昼ご飯を食べて研修終了ということになる。僕の場合もご多分に漏れず、Sasa と Michel の二人組が迎えに来てくれた。Sasa は僕の予想より 15 センチ背が高く、Michel は 15 センチ背が小さかった。ひょんなことから凸凹コンビの中サイズとして紛れ込んだアジア人は拙い英語で自分の研究構想と将来計画について食堂で雄弁に語った。そのままオフィスに案内され必要なものを大体 Sasa と Michel に揃えてもらい、初日は終わった。同室

の MIT 出身の韓国人, Sang Wong くんが友達の友達ということで事前情報が入っており, 「お前がああ Yoichi か!」と最初から仲良くなった。彼とはその夏, ALS の皆様のために頭から氷を被ったり, ギターセッションをしたりと, ずーっと同室で楽しく過ごしていた。同じく同室のインド人の Sruthi ちゃんには日本語教えてくれと言われ, 日本語教師をしばらくしていた。なるほど, 日本語を外国人が覚えたほうが, 日本人全員が英語を喋るより楽な感じがするぞ, という感じだ。

MSR に来る前に, Sasa が, ”Yoichi お前が来たらず, Mike Sinclair と仲良くなるんだ。Mike はハードウェアラボのすげーおっさんだ”と言っていたので, 初日から Mike とおしゃべりしていたら, 到着 3 日目に Mike が湖で自前のヨットに乗せてくれた。夏のシアトルは夜の 9 時過ぎまで明るく, 湖に沈む夕日はすばらしい。エンジンなしに水面を走るヨットは流体力学の賜物だと思った。

1 週間くらい経ったある日, Michel と Sasa が Computer Vision のメンターとして 4 人目のメンターを連れてきた。Eyal だった。あれ, 結局全員集合? MSR のメンターは大抵一つのグループから一人だけつくものなのだが, こうして僕は, HCI, インタラクション, ハードウェア, ヴィジョン, 4 人のメンターに囲まれながら, この夏を過ごすことになる。どうしよう, ワクワクが止まらない。

3. Microsoft Research – SIGGRAPH

行ってみて驚いたこととして, MSR は完全にアカデミックの研究所なのだ。MS は営利企業だが, MSR は素晴らしいほどにアカデミック。なぜなら, 知財チームがしっかりしているから, 最新の研究成果が Kinect や Photosynth のような形ですぐ製品としてローンチできてしまう。だから純粋にアカデミックをしてよいのだ, すばらしい。「すごいことをしろ, なぜならそれがお前がここにいる理由だからだ」, MSR の壁に貼られたポスターにはそう書いてある。そうだ, すごいことをしないと!

研究に慣れてきた頃, ラボに連泊するようになってきた。その頃, Sasa の計らいでオフィスの他にもう一つラボ部屋を貰って, そこに洋服を置いてなぜかラボに住んでいた。これで, 朝から夜まで研究ができる! 食事は自動販売機があるしシャワーがあるから大丈夫だ。Sasa と Michel に, 最初に Don't kill yourself とは言われたものの, 完全にワーカホリックの様相を見せはじめた頃, 元日本 Microsoft 社長で現 KMD の古川先生がシアトルにやってきた。16 時には帰宅する MS 社員を尻目に, 168 時間に一度帰る僕。自販機生活をしながらラボに住

む座敷童を哀れんでか, 古川先生が実にいろいろなところに連れてってくれた。SIGGRAPH のアートギャラリーに展示するためのパーツも先生が購入してくれた。そのおかげで首の皮が繋がった僕は, SIGGRAPH が開催されるバンクーバーへ, Art Gallery, E-tech, Technical Paper, Poster などを順々にこなしていった。Technical Paper の大きな発表会場を壇上から眺めてみると, あら, MSR の人や, 友達の友達ばかりじゃないかと思ったのが, 今年の夏の収穫の一つだ。飛び出してみれば, 世界は狭いコミュニティなのだ。SIGGRAPH から MSR に帰ったら, 廊下でインターンの同僚に Pixie Dust Guy と呼び止められることが増えた。仲間が増えるときはこういうときなんだな, と思った。

4. Microsoft Research から帰るまで

MSR について書いた記事が 3000RT を超えたり, 遠隔地から J-wave に出たり講演したり, すっかり MSR の人になっていた僕も, 帰る日が近づいてきた。帰国が近づくにつれ, 日本のテレビ取材やら研究先への訪問日程がスケジュール帳に埋まっていき寂しさを覚えてきた頃。成果を論文に書く日が近づいてきた。Sasa と Michel がなにやらコーディングを分担して手伝ってくれるようになって, Mike がハードウェアを作ってくれたり, Eyal が執筆手伝ってくれたり。驚くことに MSR には Gift Authorship が存在しないらしい。何て素晴らしい研究所なんだ MSR!

名前がつくプロジェクトには, 名前がつく全員がちゃんと働いて成果をあげる。そのフランクさと助け合いがよりよい成果を生み出していくんだろうと肌で感じた。気がつくとも 61 泊した研究所から離れる日になっていた。最後の週末はロスタイムとして Sasa の車で送り迎えてもらって研究していた。夏の終わりはあっけない。

短い夏だったが, 気づいたことは沢山ある。ヨットは流体力学の産物。シアトルの IPA とハンバーガーの組み合わせは最高で, ひぐひぐのお腹は柔らかい。日本の視点から離れてみれば, 世界の研究コミュニティといえども小さなもので, 壁なんてない。みんな同じ興味をもった友達だ。なぜ研究するかって? “普通のこと”じゃなくて, ”すごいこと”をするためだ。そのためにここに生きているんだから。

【略歴】

落合陽一 (OCIAI Yoichi) メディアアーティスト。
東京大学博士課程在学中。好きなものは SIGGRAPH と納豆, 巷では現代の魔法使いと呼ばれている。
<http://96ochiai.ws>